

た云いました。

先生 「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河は大体何でしょう。」

語り やっぱり星だとジョバンニは思いましたがこんどもすぐに答えることができませんでした。

語り 先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて

先生 「ではカムパネルラさん。」

語り 名指しました。するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはりもじもじ立ち上ったままやばい答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじっとカムパネルラを見ていましたが、「急いで

先生 「では、よし。」

語り と云いながら、自分で星図を指しました。

先生 「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたかさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう。」

語り ジョバンニはまつ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のな

かには涙がいっぱいになりました。

語り そうだ僕は知っていたのだ、勿論カムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどこでなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から大きな

本をもつてきて、ぎんがというところをひろげ、まつ黒な頁いっぱいに白い点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れる筈もなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午后にも仕事がつらく、学校

に出てももうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を云わないようになったので、カムパネルラがそれを知つて気の毒がってわざと返事をしなかったのだ。そ

う考えるとたまらないほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのでした。

語り 先生はまた云いました。

先生 「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるならもつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで

細かにかんではいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと云いますと、それは真空という光をある速さで伝えるもので、太陽や地球もやっぱりそのな

かに浮んでいのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちように水が深いほど青く見えるように、天

の川の底の深く遠いところほど星がたかさん集つて見えましたが、白くぼんやり見えるのです。この模型をごらんなさい。」

語り 先生は半にたかさん光る砂のつぶの入った大きな両面の凸レンズを指しました。

先生 「天の川の形はちようにこんなのです。このいちいちの光るつぶがみんな私どもの太陽と同じようにじぶんで光っている星だと考えます。私どもの太陽がこのほぼ中ごろにあつて地球がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜にこのまん中に立つてこのレン

ズの中を見まわすとしてごらんなさい。こつちの方はレンズが薄いのでわずかの光る粒即ち星しか見えないでしょう。こつちやこつちの方はガラスが厚いので、光る粒即ち星が

たくさん見えその遠いのはぼうつと白く見えるというこれがつまり今日の銀河の説なので
す。そんならこのレンズの大きさがどれ位あるかまたその中のさまさまの星についてはも
う時間ですからこの次の理科の時間にお話します。では今日はその銀河のお祭なのです
らみなさんは外へでてよくそらをごらん下さい。ではここまでです。本やノートをおしま
いなさい。」

語り　そして教室中はしばらく机の蓋をあげたりしめたり本を重ねたりする音がいつぱい
でしたがまもなくみんなはきちんと立って礼をするので教室を出ました。

二、活版所

ジョバンニ
工場

語り　ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七八人は家へ帰らずカムパネルラをま
ん中にして校庭の隅の桜の木のところを集まっていた。それはこんやの星祭に青いあ
かりをこしらえて川へ流す烏瓜を取りに行く相談らしかったのです。

語り　けれどもジョバンニは手を大きく振ってどしどし学校の門を出て来ました。すると
町の家々ではこんやの銀河の祭りにいちいの葉の玉をつるしたりひのきの枝にあかりをつ
けたりいろいろ仕度をしているのでした。

語り　家へは帰らずジョバンニが町を三つ曲つてある大きな活版処にはいつてすぐ入口の
計算台に居ただぶだぶの白いシャツを着た人におじぎをしてジョバンニは靴をぬいで上り
ますと、突き当りの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついてたたくさんの
輪転器がばたりばたりとまわり、きれで頭をしばつたりラムプシェードをかけたたりした人
たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたたくさん働いて居りました。

語り　ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子に座つた人の所へ行つておじぎをし
ました。その人はしばらく棚をさがしてから、
受付「これだけ拾つて行けるかね。」

語り　一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとか
ら一つの小さな平たい函をとりだして向うの電燈のたたくさんついた、たてかけてある壁の
隅の所へしやがみ込むと小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次と拾いは
じめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら

工員　「よう、虫めがね君、お早う。」と云いますと、近くの四五人の人たちが声もたて
ずこつちも向かず冷たくわらいました。

語り　ジョバンニは何べんも眼を拭いながら活字をだんだんひろいました。

語り　六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾つた活字をいつぱいに入れた平
たい箱をもういちど手にもつた紙きれと引き合せてから、さつきの卓子の人へ持つて来ま
した。その人は黙つてそれを受け取つて微かにうなずきました。

語り　ジョバンニはおじぎをすると扉をあけてさつきの計算台のところに来ました。する
とさつきの白服を着た人がやっぱりだまって小さな銀貨を一つジョバンニに渡しました。

ジョバンニは俄かに顔いろがよくなって威勢よくおじぎをすると台の下に置いた靴をもつ
ておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛を吹きながらパン屋へ寄つてパンの塊
を一つと角砂糖を一袋買いますと一目散に走りだしました。

三、家

シ
母

語り ジョバンニが勢よく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口の一番左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いが下りたままになっていました。

ジョバンニ 「お母さん。いま帰ったよ。工合悪くなかったの。」語り ジョバンニは靴をぬぎながら云いました。

母 「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうつと工合がいいよ。」

語り ジョバンニは玄関を上って行きますと、~~ジョバンニのお母さん~~すぐ入口の室に白い巾を被つて寝んでいたのでした。ジョバンニは窓をあけました。

ジョバンニ 「お母さん。今日は角砂糖を買ってきたよ。牛乳に入れてあげようと思つて。」

母 「ああ、お前さまにおあがり。あたしはまだほしくないんだから。」

ジョバンニ 「お母さん。姉さんはいつ帰ったの。」

母 「ああ、三時ころ帰ったよ。みんなそこらをしてくれてね。」

ジョバンニ 「お母さんの牛乳は来ていないんだろうか。」

母 「来なかつたらうかねえ。」

ジョバンニ 「ぼく行つてとつて来よう。」

母 「ああ、あたしはゆつくりでいいんだからお前さまにおあがり、姉さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置いて行つたよ。」

ジョバンニ 「ではぼくたべよう。」

語り ジョバンニは窓のところからトマトの皿をとつて、パンといっしょにしばらくむしゃむしゃたべました。

ジョバンニ 「ねえ、お母さん。ぼくお父さんはきつと間もなく帰つてくると思うよ。」

母 「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの。」

ジョバンニ 「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁は大へんよかつたと書いてあつたよ。」

母 「ああ、ただねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない。」
トナカイ

ジョバンニ 「きつと出ているよ。お父さんが監獄へ入るようなそんな悪いことをした筈がないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだの、~~お父さん~~の角だの、今だつてみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がわかるがわる教室へ持つて行くよ。」
トナカイ

母 「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといつたねえ。」

ジョバンニ 「みんながぼくに、あうとそれを云うよ。ひやかすように云うんだ。」

母 「おまえに悪口を云うの。」

ジョバンニ 「うん、けれどもカムパネルラなんか決して云わない。カムパネルラはみんながそんなことを云うときは気の毒そうにしているよ。」

母 「あの人のうちのお父さんとはちよとおまえたちのように小さいときからのお友達だつたそうだよ。」

のお父さん

ジョバンニ「あ、だからお父さんはぼくを、あれ、カムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中だ、びたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちはアルコーラムプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合せると円くなって、それに電柱や信号標もついていて、信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、罐がすっかり煤けたよ。」

母「そうかねえ。」

ジョバンニ「いまも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家中まだしいんとしているからな。」

母「サウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角まで、もつとついてくるよ、きつと犬もついて行くよ。」

母「そうだ。今晚は銀河のお祭だねえ。」

ジョバンニ「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ。」

母「ああ、行っておいで。川へははいらないでね。」

ジョバンニ「あ、ぼく岸から見るだけなんだ。一時間で行ってくるよ。」

母「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんと一緒に心配はないから。」

ジョバンニ「ああ、きつと一緒だよ。お母さん、窓をしめて置こうか。」

母「ああ、どうか。もう涼しいからね。」

語り ジョバンニは立って窓をしめお皿やパンの袋を片附けると勢よく靴をはいて

ジョバンニ「では一時間半で帰ってくるよ。」

語り と云いながら暗い戸口を出ました。

四、ケンタウル祭の夜

ジョバンニ
ザネリ
牛乳屋
ザネリ

語り ジョバンニは、口笛を吹くようなさびしい口付きで、楯のまつ黒にならんだ町の坂を下りて来たのを見た。

語り 坂の下に大きな一つの街燈が、青白く立派に光って立っていました。ジョバンニが、ほとんど電燈の方へ下りて行きますと、いままでだけもののように、長くぼんやり、うしろへ引いていたジョバンニの影ぼうしは、だんだん濃く黒くはつきりなつて、足をあげたり手を振ったり、ジョバンニの横の方へまわつて来るのでした。

ジョバンニ「ぼくは立派な機関車だ。ここは勾配だから速いぞ。ぼくはいまその電燈を通り越す。そうら、こんどはぼくの影法師はコムパスだ。あんなにくるつとまわつて、前の方へ来た。」

語り ジョバンニが思ひながら、大股にその街燈の下を通り過ぎたとき、まのザネリが、新しいえりの尖ったシャツを着て、電燈の向う側の暗い小路から出て来て、ひらつとジョバンニとすれちがいました。

ジョバンニ「ザネリ、烏瓜ながしに行くの。」

語り ジョバンニがまだそう云つてしまわないうちに、

よしん。

「ザネリ「ジョバンニ、お父さんから、らつこの上着が来るよ。」
語り その子が投げつけるようにしろから叫びました。」

語り ジョバンニは、ぼつと胸がつめたくなり、そこからいきんと鳴るように思いました。
ジョバンニ「何だい。ザネリ。」

語り ジョバンニは高く叫び返しましたが、~~も~~ザネリは向うのひばの植った家の中へは
いっていません。

ジョバンニ「ザネリはどうしてぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのだろう。走
るときはまるで鼠のようなくせに。ぼくがなんにもしないのにあんなことを云うのはザネ
リがばかからだ。」

語り ジョバンニは、せわしくいるの事を考えたが、さまざまの灯や木の枝で、
すっかりきれいに飾られた街を通って行きました。時計屋の店には明るくネオン燈がつい
て、一秒ごとに石でこされたふくろうの赤い眼が、くるつくるとうごいたり、いろいろ

な宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って星のようにゆっくり循環したり、また向
う側から、銅の人馬がゆっくりこちへまわって来たりするのでした。そのまん中に円い

黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってありました。
語り ジョバンニはわれを忘れて、その星座の図に見入りました。

語り それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、その日と時間に合
せて盤をまわすと、そのとき出ているそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらわれる

ようになって居り、そのまん中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったような帯
になってその下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげているように見えるのでした。ま

たそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立っていました。いち
ばんうしろの壁には空じゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図が
かかっていました。ほんとうにこんなような蝸だの勇士だのそらにぎっしり居るだろうか、

ああぼくはその中をどこまでも歩いて見たいと思つて走りまわらばらくぼんやり立って居
ました。

語り それから俄かにお母さんの牛乳のことを思い出して、ジョバンニはその店をはなれま
した。そしてきゆうくつな上着の肩を気にしながらそれでもわざと胸を張って大きく手を

振って町を通って行きました。

語り 空気は澄みきって、まるで水のように通りや店の中を流れましたし、街燈はみなま
つ青なみや櫛の枝で包まれ、電気会社の前の六本のプラタヌスの木などは、中に沢山の

豆電燈がついて、ほんとうにそこらは人魚の都のように見えるのでした。子どもらは、み
んな新しい折のついた着物を着て、星めぐりの口笛を吹いたり、

子どもたち「ゲンタウルス、露をふらせ。」
語り と叫んで走ったり、青いマグネシヤの花火を燃したりして、たのしそうに遊んでい
るのです。

語り けれどもジョバンニは、いつかまた深く首を垂れて、そこらのにぎやかさはまる
でちがったことを考えながら、牛乳屋の方へ急ぐのでした。

語り ジョバンニは、いつか町はずれのポプラの木が幾本も幾本も、高く星ぞらに浮んで
いるところに来ていました。その牛乳屋の黒い門を入り、牛の匂のするうすうすらい台所の

前に立って、ジョバンニは帽子をぬいで、~~ズボ~~ズボを脱ぎ捨て、

ト
ン

い

「ジョバンニ「今晚は、」
語り「お云いしました、家の中はいいんとして誰も居たようではありませんでした。」
ジョバンニ「今晚は、ごめんなさい。」

語り ジョバンニはまっすぐに立ってまた叫びました。するとしばらくたってから、(年老) った女の人が、どこか工合が悪いようにそろそろと出て来て何か用かと口の中で云いました。

ジョバンニ「あの、今日、牛乳が僕ん(牛乳)は小書書」とこへ来なかつたので、貰いにあがったんです。」
牛乳屋「いま誰もいないでわかりません。あしたにして下さい。」

語り その人は、赤い眼の下のところを擦りながら、ジョバンニを見おろして云いました。

ジョバンニ「おつかさんが病気なんですから、今晚でないと困るんです。」

牛乳屋「ではもう少したつてから来て下さい。」

語り その人はもう行ってしまひました。

ジョバンニ「そうですか。ではありがとうございます。」

語り ジョバンニは、お辞儀をして台所から出ました。

語り 十字になった町のかどを、まがろうとしましたら、向うの橋へ行く方の雑貨店の前

で、黒い影やぼんやり白いシャツが入り乱れて、六七人の生徒らが、口笛を吹いたり笑ったりして、めいめい烏瓜の燈火を持ってやってくるのを見ました。その笑い声も口笛も、

みんな聞きおぼえのあるものでした。ジョバンニの同級の子供らだったので。ジョバンニは思わずどきどきとして戻ろうとしましたが、思い直して、一そう勢よくそっちへ歩いて行きました。

語り 「川へ行くの。」

語り ジョバンニが云おうとして、少しのどがつまったように思ったとき、

ザネリ 「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」

語り (ザネリ) ザネリがまた叫びました。

子どもたち「ジョバンニ、らっこの上着が来るよ。」

語り すぐみんなが、続いて叫びました。ジョバンニはまっ赤になって、もう歩いている

かもわからず、急いで行きすぎようと思いましたら、そのなかにカムパネルラが居たのです。

カムパネルラは気の毒そうに、だまって少しわらって、怒らないだろうかというようにジ

ョバンニの女を見ました。

語り ジョバンニは、遁げるようにその眼を避け、そしてカムパネルラのせいの高いかた

ちが過ぎて行って間もなく、みんなはてんでに口笛を吹きました。町かどを曲るとき、ふ

りかえって見ましたら、ザネリがやはりふりかえって見ていました。そしてカムパネルラ

もまた、高く口笛を吹いて向うにぼんやり見える橋の方へ歩いて行ってしまったのです。

ジョバンニは、なんとも云えずさびしくなって、いきなり走り出しました。すると耳は手

をあてて、わああと云いながら片足でびよんびよん跳んでいた小さな子供らは、ジョバン

ニが面白くてかけるのだと思つてわあいと叫びました。まもなくジョバンニは黒い丘の方

へ急ぎました。

五、天気輪の柱

いましん。

語り 牧場のうしろはゆるい丘になって、その黒い平らな頂上は、北の大熊星の下に、ぼんやりとだんよりも低く連つて見えました。

語り ジョバンニは、露の降りかかつた小さな林のこみちを、どんどのぼって行きました。まつくらの草や、いろいろな形に見えるやぶのしげみの間を、め小さなみちが、

一すじ白く星あかりに照らしだされてあつたのです。草の中には、ぴかぴか青びかりを出す小さな虫もいて、ある葉は青くすかし出され、ジョバンニは、さつきみんなの持つて行った烏瓜のあかりのようだとも思いました。

語り そのまつ黒な、松や檜の林を越えると、俄かにがらんと空がひらけて、天の川がしららと南から北へ亘つているのが見え、また頂の、天気輪の柱も見わけられたのでした。つりがねそうか野ぎくかの花が、そこらいちめんは、夢の中からも薫りだしたというように咲き、鳥が一疋、丘の上を鳴き続けながら通つて行きました。

語り ジョバンニは、頂の天気輪の柱の下に来て、どかどかするからだを、つめたい草に投げました。

語り 町の灯は、暗の中をまるで海の底のお宮のけしきのようにほとり、子供らの歌う声や口笛、きれぎれの叫び声もかすかに聞えて来るのでした。風が遠くで鳴り、丘の草もしずかにそよぎ、ジョバンニの汗でぬれたシャツもつめたく冷されました。ジョバンニは町のはずれから遠く黒くひろがつた野原を見わたしました。

語り そこから汽車の音が聞えてきました。その小さな列車の窓は、一列小さく赤く見え、その中にはたくさんの旅人が、苹果を剥いたり、わらったり、いろいろな風になっていると考えますと、ジョバンニは、もう何とも云えずかなしくなつて、また眼をそらに挙げました。

3

ジョバンニ あああの白いそらの帯がみんな星だというぞ。

語り ところがいくら見ている、そのそらはひる先生の云つたような、がらんとした冷たいとこだとは思われませんでした。それどころでなく、見れば見るほど、そこは小さな林や牧場やある野原のように考えられて仕方なかつたのです。そしてジョバンニは青い琴の星が、三つにも四つにもなつて、ちらちら瞬き、脚が何べんも出たり引つ込んだりして、とうとう藪のように長く延びるのを見ました。またまぐ眼の下のまみまでがやまぼんやりしたたくさんの星の集りか一つの大きなけむりのように見えるようには思、ました。

六、銀河ステーション

ジョ

カ

す

町

立 評

語り するとどこかで、ふしぎな声か、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声が出た。しばらく堂のように、へかへか消えたりともつたりと、ゆるいものを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青の色の野原にたちました。いま新ら、灼いたばかりの青い鋼の板のような、その野原に、まつすぐはすきのと立つたのです。

語り するとどこかで、ふしぎな声か、銀河ステーション、銀河ステーションと云う声が出た。しばらく堂のように、へかへか消えたりともつたりと、ゆるいものを見ました。それはだんだんはつきりして、とうとうりんとうごかないようになり、濃い鋼青の色の野原に、まつすぐはすきのと立つたのです。

リマシエ

12 13

らないうために、わざと獲れないふりをして、かくして置いた金剛石を、誰かがいきなりひ
くくりかえして、ばら撒いたという風に、眼の前がさあつと明るくなつた。ジョバンニは、
思わず何へんも眼を擦つてしまいました。

語り 気がついてみると、さつきから、「どこどこ」と、ジョバンニの乗っている小さ
な列車が走りつづけていたのです。ほんとうにジョバンニは、夜の軽便鉄道の、小さな
黄色の電燈のならんだ車室に、窓から外を見ながら座っていたのです。車室の中は、青
い天蚕絨を張った腰掛けが、まるでがら明きで、向うの鼠いろのワニスを塗った壁には、
真鍮の大きなぼたんが二つ光っているのです。

語り すぐ前の席に、ぬれたようにまつ黒な上着を着た、せいの高い子供が、窓から頭を
出して外を見ているのに気が付きました。そしてその子どもの肩のあたりが、どうも見た
ことのあるような気がして、それを思うと、もうどうしても誰だかわかりたくて、たまたま
くなりなりました。いきなりこつちも窓から顔を出そうとしたとき、俄かにその子供が頭を引
つ込めて、こつちを見ました。

語り それはカムパネルラだったのです。

語り ジョバンニが「カムパネルラ、きみは前からここに居たのと云おうと思ったとき、
カムパネルラが

カムパネルラ「みんなはねずいぶん走ったけれども遅れてしまったよ。ザネリもね、ずい
ぶん走ったけれども追いつかなかった。」

語り と云いました。

語り ジョバンニは、(そうだ、ぼくたちはいま、いつしよにさそつて出掛けたのだ。)

とおもいながら、
ジョバンニ「どこかで待っていていようか」

語り カムパネルラは、なせかそう云いながら、少し顔いろが青ざめて、どこか苦しいと
いうふうでした。するとジョバンニも、なんだかどこかに、何か忘れたものがあるとい
うようなおかしな気持ちが出てしまっていました。

語り ところがカムパネルラは、窓から外をのぞきながら、もうすっかり元気が直つて、
勢よく云いました。

カムパネルラ「ああ、しまった。ぼく、水筒を忘れてきた。スケッチ帳も忘れてきた。けれ
ど構わない。もうじき白鳥の停車場だから。ぼく、白鳥を見るね、ほんとうにすきだ。
川の遠くを飛んでいたって、ぼくはきつと見える。」

語り カムパネルラは、円い板のようになった地図を、しきりにぐるぐるまわし
て見ていました。またその中に、白くあらわされた天の川の左の岸に沿って一条の鉄
道線路が南へ南へとたどって行くのを見た。そしてその地図の立派なところは、夜のよう
なまつ黒な盤の上に、二つの停車場や三角標、泉水や森が、青や橙や緑や、あつくしい光
でもりばめられてありました。ジョバンニはなんだかその地図をどこかで見たようにおも
いました。

ジョバンニ「この地図はどこで買ったの。黒曜石でできてるねえ。」

カムパネルラ

ジョバンニ

語り

な

い

いちいち

言葉

9

ジョバンニ
の
三角標

カムパネルラ「銀河ステーションで、もらったんだ。君もわなかったの。」
ジョバンニ「ああ、ぼく銀河ステーションを通つたろうか。いまぼくたちの居るとこ、ここだろう。」
語り ジョバンニは、白鳥と書いてある停車場のしるしの、すぐ北を指しました。
カムパネルラ「そうだ。おや、あの河原は月夜だろうか。」
語り そつちを見ますと、青白く光る銀河の岸に、銀いろの空のすすきが、もうまるでいちめん、風にさらさらさらさら、ゆられてうごいて、波を立てているのです。

語り ジョバンニは、あんなながら、まるではね上りたいくらい愉快になって、足をこつこつ鳴らし、窓から顔を出して、高く高く星めぐりの口笛を吹きながら一生けん命延びあがつて、その天の川の水を、見きわめようとしたが、はじめはどうしてもそれが、はつきりしませんでした。けれどもだんだん気をつけて見ると、そのきれいな水は、ガラスよりも水素よりもすきとおつて、ときどき眼の加減か、ちらちら紫いろのこまかな波をたてたり、虹のようにぎらつと光つたりしながら、声もなくどんだん流れて行き、野原にはあつちにもこつちにも、燐光の三角標が、うつくしく立っていたのです。遠いものは小さく、近いものは大きく、遠いものは橙や黄いろではつきりし、近いものは青白く少しかすんで、或いは三角形、或いは四辺形、あるいは電や鎖の形、さまざまにならんで、野原いっぱい光っているのです。ジョバンニは、まるでときどきして、頭をやけに振りまわした。するとほんとうに、そのきれいな野原中の青や橙や、いろいろかがやく三角標も、てんでに息をつくように、ちらちらゆれたり震えたりしました。

語り ジョバンニは去りました。

語り ジョバンニ「ぼくはもう、すっかり天の野原にきた。」

語り ジョバンニが左手をつき出して窓から前の方を見ながら云いました。
カムパネルラ「アルコールが電気だろう。」

語り カムパネルラが云いました。
語り 「ことごとことごと」その小さなきれいな汽車は、そのすすきの風にひるがえる中を、天の川の水や、三角点の青じろい微光の中を、どこまでもどこまでもと、走って行くのでした。

カムパネルラ「ああ、りんどうの花が咲いている。もうすっかり秋だねえ。」
語り カムパネルラが、窓の外を指さして云いました。

語り 線路のへりになったみじかい芝草の中に、月長石でも刻まれたような、すばらしい紫のりんどうの花が咲いていました。

ジョバンニ「ぼく、飛び下りて、あいつをとって、また飛び乗ってみせようか。」
語り ジョバンニは胸を躍らせて云いました。

カムパネルラ「もうだめだ。あんなにうしろへ行ってしまったから。」

語り カムパネルラが、そう云ってしまうかしまわないうち、次のりんどうの花が、いっぱい光って過ぎて行きました。

語り 石思のたわも次から次から、たくさんのきんいろな底をもつたりんどうの花のこつプが、湧くように、雨のように、眼の前を通り、三角標の列は、けむるように燃えるよ

うに、いよいよ光って立ったのです。

七、北十字とプリオンシム海岸

カムパネルラ「おつかさんは、ぼくをゆるして下さるだろうか。」

語り いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、急ぎこ

「語り」 ジョバンニは、じつじつ、

（ああ、そうだ、ぼくのおつかさんは、あの遠い一つのちりのように見えるだんだんの三角標のあたりにいらつしやつて、いまぼくのことを考えているんだった。）を思ひながら

ほんやりしてだまつていました。

しあわせ

カムパネルラ「ぼくはおつかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おつかさんのいちばんの幸なんだろう。」

語り「カムパネルラは、なんだが、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「つらさ

「ジョバンニ」きみのおつかさんは、なんにもひどいことないじゃないの。」

語り「カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。」

語り 俄かに、車のながなが、ぱつと白く明るくなりました。見ると、もうじつ、金剛石や草の露やあらゆる立派さをあつめたような、きらびやかな銀河の河床の上を水は声もな

くかたちもなく流れ、その流れのまん中に、ぼうつと青白く後光の射した一つの島が見えるのでした。その島の平らないただきに、立派な眼もさめるような、白い十字架がたつて

いて、それはもう凍った北極の雲で鑄たといったらいいか、すきつとした金いろの円光をいた

人びと「ハルレヤ、ハルレヤ。」

語り 前からもうしろからも声が起りました。ふりかえって見ると、車室の中の旅人たちは、みなまつすぐにきもののひだを垂れ、黒いバイブルを胸にあてたり、水晶の珠数をか

けたり、どの人もつつましく指を組み合せて、そつちに祈っているのです。思わず二人もまつすぐに立ちあがりました。カムパネルラの頬は、まるで熟した蘋果のあかしのよう

にうつくしくかがやいて見えました。

語り そして島と十字架とは、だんだんうしろの方へうつって行きました。

語り 向う岸も、青じろくぼうつと光ってけむり、時々、やつぱりすずきが風にひるがえ

るらしく、さつとその銀いろがけむって、息でもかけたように見え、また、たくさんのり

んどうの花が、草をかくれたり出たりするのは、やさしい狐火のように思われました。

「よしん

善物

「語り」

いまう。

立

語り

語り

いっか

ました。ジヨバンニのうしろには、いつから乗っていたのか、せいの高い、黒いかつぎをしたカトリック風の尼さんが、まん円な緑の瞳を、じつとまっすぐに落して、まだ何かこ
とばか声かが、そつちから伝わって来るのを、虔んで聞いているというように見えました。
旅人たちはしずかに席に戻り、二人も胸いっぺいのかなしみに似た新しい気持ち、何
気なくちがった語で、そつと談し合つたのです。

カムパネルラ「もうじき白鳥の停車場だねえ。」
ジヨバンニ「ああ、十一時かつきりには着くんだよ。」

語り 厚くもシングナルの緑の燈と、ぼんやり白い柱とが、ちらつと窓の邊を過ぎ、そ
れから硫黄のほのおのようなくらいぼんやりした転てつ機の前のあかりが窓の下を通り、
汽車はだんだんゆるやかになつて、間もなくプラットホームの一系列の電燈が、
規則正しくあらわれ、それがだんだん大きくなつて、人は一度白鳥停車場の、
大きな時計の前に来てとまりました。

語り さわやかな秋の時計の盤面は青く灼かれたはがねの二本の針が、くつきり十
一時を指しました。みんなは「ぺんに下りて、車室の中はがらんとつてしまいました。
「二十分停車」と時計の下に書いてありました。」

語り ジヨバンニ「ぼくたちも降りて見ようか。」
語り ジヨバンニが去りました。

カムパネルラ「降りよう。」
語り 二人は一度にはねあがつてドアを飛び出し、改札口へかけて行きました。

語り 改札口には、明るい紫がかつた電燈が、一つ点いているばかり、誰も居ませんでした。
そこら中を見ても、駅長や赤帽らしい人の、影もなかつたのです。

語り 二人は、停車場の前の、水晶細工のように見える銀杏の木に囲まれた、小さな広
場に出ました。そこから幅の広いみちが、まっすぐに銀河の青光の中へ通つていきました。

語り さきに降りた人たちは、もろどこへ行つたか一人も見えませんでした。二人がそ
の白い道を、肩をならべて行きますと、二人の影は、ちやうど四方に窓のある室の中の、
二本の柱の影のように、また工つた車輪の輻のように幾本も幾本も四方へ出るのでした。

語り 夢のように云っているのよ。ま
カムパネルラは、そのきれいな砂を一つまみ、掌にひろげ、指できしきしさせな
がら

語り 夢のように云っているのよ。ま
カムパネルラ「この砂はみんな水晶だ。中で小さな火が燃えている。」
ジヨバンニ「そうだ。」

語り どこでぼくは、そんなこと習つたらうと思ひながら、ジヨバンニもぼんやり答
えました。

語り 河原の礫は、みんなすきとおつて、たしかに水晶や黄玉や、またくしやくしやの
轍曲をあらわしたのや、また稜から霧のような青白い光を出す鋼玉やらでした。ジヨバン
ニは、走つてその渚に行つて、水に手をひたしました。けれどもあやしい銀河の水は、

水素よりもつとすきとおつていたのでした。それでもたしかに流れていたことは、二人の
手首の、水にひたつたところが、少し水銀いろに浮いたように見え、その手首にぶつつかつ

てきた波は、うつくしい燐光をあげて、ちらちらと燃えるように見えたのでもわかりま
した。

語り

語り

くろくろのま

語り 川上の方を見ると、すすきのいっばいに生えている崖の下に、白い岩が、まるで運動場のように平らに川に沿って出ているのでした。そこに小さな五六人の人が、何か掘り出すか埋めるかしているらしく、立ったり屈んだり、時々なにかの道具が、ピカッと光ったりしました。

ジヨバンニ・カムパネルラ「行ってみよう。」

語り 二人は、まるで一度に叫んで、そっちの方へ走りしました。その白い岩になった処の

入口に、

「プリオシン海岸」という、瀬戸物のつるつるした標札が立って、向うの渚には、

ところどころ、細い鉄の欄干も植えられ、木製のきれいなベンチも置いてありました。

カムパネルラ「おや、変なものがあるよ。」

語り カムパネルラが、不思議そうに立ちどまって、岩から黒い細長いさきの尖ったく

るみの実のようなものをひろいました。

カムパネルラ「くるみの実だよ。そら、沢山ある。流れて来たんじゃない。岩の中に入っ

てるんだ。」

ジヨバンニ「大きいね、このくるみ、倍あるね。こいつはすこしもいたんでない。」

カムパネルラ「早くあすこへ行つて見よう。きつと何か掘つてるから。」

語り 二人は、ぎざぎざの黒いくるみの実を持ちながら、またさっきの方へ近づいて行

きました。左手の渚には、波がやさしい稲妻のように燃えて寄せ、右手の崖には、いちめ

ん銀や貝殻でこさえたようなすすきの穂がゆれたのです。

語り だんだん近付いて見ると、一人のせいの高い、ひどい近眼鏡をかけ、長靴をはいた

学者らしい人が、手帳に何かせわしそうに書きつけながら、鶴嘴をふりあげたり、スコ

ップをつかっていたりしている、三人の助手らしい人たちに夢中でいろいろ指図をしていました。

学者「そのその突起を壊さないように。スコップを使いたまえ、スコップを。おっと、

も少し遠くから掘つて。いけない、いけない。なぜそんな乱暴をするんだ。」

語り 見ると、その白い柔らかな岩の中から、大きな大きな青じろい獣の骨が、横に倒

れて潰れたという風になって、半分以上掘り出されていました。そして気をつけて見ると、

そこらには、蹄の二つある足跡のついた岩が、四角に十ばかり、きれいに切り取られて番

房がつけられてありました。

学者「君たちは参観かね。」

語り その大学士らしい人が、眼鏡をきらっとさせて、こつちを見て話しかけました。

学者「くるみが沢山あったろう。それはまあ、ざつと百二十年ぐらい前のくるみだよ。

ごく新しい方さ。ここは百二十万年前、第三紀のあとのころは海岸でね、この下からは

貝がらも出る。いま川の流れているところに、そっくり塩水が寄せたり引いたりもしていた

のだ。このけものかね、これはボスといってね、おいおい、そこつるはしはよしたまえ。

ていねいに鑿でやつてくれたまえ。ボスといってね、いまの牛の先祖で、昔はたくさん居

たさ。」

ジヨバンニ「標本にするんですか。」

学者「いや、証明するに要るんだ。ぼくらからみると、ここは厚い立派な地層で、百二十

万年ぐらい前にできたという証拠もいろいろあがるけれども、ぼくらとちがったやつから

みてもやっぱりこんな地層に見えるかどうか、あるいは風か水やがらんとした空か見え

やしないかということなのだ。わかったかい。けれども、おいおい。そこもスコップではいけない。そのすぐ下に肋骨が埋もれてる筈じゃないか。」

語り 大学士はあわてて走って行きました。

カムパネルラ「もう時間だよ。行こう。」

語り カムパネルラが地図と腕時計とをくらべながら云いました。

ジョバンニ「ああ、ではわたくしどもは失礼いたします。」

語り ジョバンニは、ていねいに大学士におじぎしました。

学者「そうですね。いや、さよなら。」

語り 大学士は、また忙がしそうに、あちこち歩きまわって監督をはじめました。二人

は、その白い岩の上を、一生けん命汽車におくれないように走りました。そしてほんとう

に、風のように走れたのです。息も切れず膝もあつくありませんでした。

語り こんなにしてかけるなら、もう世界中だつてかけられると、ジョバンニは思いました。

語り そして二人は前のあの河原を通り、改札口の電燈がだんだん大きくなって

もなく二人は、もとの車室の席に座つて、いま行つて来た方を、窓から見ていました。

八、鳥を捕る人

鳥捕り「ここへかけてもようございますか。」

語り がさがさしたけれど親切そうな、大人の声がうしろで聞えました。

語り それは、茶いろの少しぼろぼろの外套を着て、白い巾でつつんだ荷物を、二つに分けて肩に掛けた、赤髯のせなかのかがんだ人でした。

ジョバンニ「ええ、いいんです。」

語り ジョバンニは、少し肩をすぼめて挨拶しました。その人は、ひげの中でかすかに

微笑いながら荷物をゆっくり網棚にのせました。ジョバンニは、なにか大へんさびしいよ

うなかなしいような気がして、だまつて正面の時計を見ていました。ずつと前の方で、

硝子の笛のようなものが鳴りました。汽車はもう、しずかにうごいていたのです。カムパ

ネルラは、車室の天井を、あちこち見ていました。その一つのあかりに黒い甲虫がとまっ

てその影が大きく天井にうつつていたのです。赤ひげの人は、なにかなつかしそうにわら

いながら、ジョバンニやカムパネルラのようすを見ていました。汽車はもうだんだん早く

なつて、すすきと川と、かわるがわる窓の外から光りました。

語り 赤ひげの人が、少しもおずおずしながら、女に訊きました。

鳥捕り「あなた方は、どちらへいらつしやるんですか。」

ジョバンニ「どこまでも行くんです。」

語り ジョバンニは、少しきまり悪そうに答えました。

鳥捕り「それはいいね。この汽車は、どこまでも行きますぞ。」

カムパネルラ「あなたはどこへ行くんです。」

語り カムパネルラが、いきなり、喧嘩のようにたずねましたので、ジョバンニは、思

わずわらいました。すると、向うの席に居た、尖った帽子をかぶり、大きな鍵を腰に下げ

た人も、ちらつとこつちを見てわらいましたので、カムパネルラも、つい顔を赤くして笑

いだしてしまいました。ところがその人は別に怒ったでもなく、頬をぴくぴくしながら返事しました。

鳥捕り「わっしはすぐそこで降ります。わっしは、鳥をつかまえる商売でね。」

カムパネルラ「何鳥ですか。」

鳥捕り「鶴や雁です。さきも白鳥もです。」

カムパネルラ「鶴はたくさんいますか。」

鳥捕り「居ますとも、さつきから鳴いてまさあ。聞かなかったのですか。」

カムパネルラ「いいえ。」

鳥捕り「いまでも聞えるじやありませんか。そら、耳をすまして聴いてごらんさい。」

語り 二人は眼を挙げ、耳をすましました。ごとごと鳴る汽車のひびきと、すすきの風との間から、ころんころんと水の湧くような音が聞えて来るのでした。

ジョバンニ「鶴、どうしてとるんですか。」

鳥捕り「鶴ですか、それとも鷺ですか。」

ジョバンニ「鷺です。」

語り ジョバンニは、どっちでもいいと思いつながら答えました。

鳥捕り「そいつはな、雑作ない。さきというものは、あの天の川の砂が凝って、ぼおつとできるもんですからね。そして始終川へ帰りますからね。川原で待っていて、鷺がみんな、脚をこいう風にして下りてくるところを、そいつが地べたへつくつかつかないうちに、びたつと押えちまうんです。するともう鷺は、かたまつて安心して死んじまいます。あと

はもうわかり切つてまさあ。押し葉にするだけです。」

ジョバンニ「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか。」

鳥捕り「標本じゃありません。みんなたべるじゃありませんか。」

カムパネルラ「おかしいねえ。」

語り カムパネルラが首をかじりました。

鳥捕り「おかしいも不審もありませんや。そら。」

語り その男は立って、網棚から包みをおろして、手ばやくくるくると解きました。

鳥捕り「さあ、ごらんさい。いまとつて来たばかりです。」

ジョバンニ・カムパネルラ「ほんとうに鷺だねえ。」

語り 人は思わす叫びました。まっ白なあのさつきの北の十字架のように光る鷺のからだは、十ばかり、少少ひらべつたくなって、黒い脚をちぢめて、浮彫のようにならんでいたのです。

カムパネルラ「眼をつぶってるね。」

語り カムパネルラは、指でそつと、鷺の三日月がたの白い瞑った眼にさわりました。

鳥捕り「ね、そうでしょう。」

語り 鳥捕りは風呂敷を重ねて、またくるくると包んで紐でくくりました。誰がいったいここらで鷺なんぞ喰べるだろうとジョバンニは思いながら訊きました。

ジョバンニ「鷺はおいしいんですか。」

鳥捕り「ええ、毎日注文があります。しかし雁の方が、もつと売れます。雁の方がずつと柄がいいし、第一手数がありませんからな。そら。」

語り 鳥捕りは、また別の方の包みを解きました。すると黄と青じろとまだらになって、なにかのあかりのようにひかる雁が、ちょうどさっきの鷺のように、くちばしを揃えて、少し扁べったくたくなって、ならんでいました。

鳥捕り「こっちはすぐ喰べられます。どうです、少しおあがりなさい。」

語り 鳥捕りは、黄いろな雁の足を、軽くひっぱりました。するとそれは、チョコレートでもできてるように、すつときれいにはなれました。

鳥捕り「どうぞです。すこしたべてごらんなさい。」

語り 鳥捕りは、それを二つにちぎってわたししました。ジヨバンニは、ちよつと喰べてみて、「なんだ、やつぱりこいつはお菓子だ。チョコレートよりも、もつとおいしいけれど、こんな雁が飛んでいるもんか。この男は、どこそこらの野原の菓子屋だ。けれど、もほくは、このひとをばかにしながら、この人のお菓子をたべているのは、大へん気の毒だ。」とおもいながら、やつぱりぼくぼくそれをたべていました。

鳥捕り「もう少しおあがりなさい。」

語り 鳥捕りがまた包みを出しました。ジヨバンニは、もつとたべたかったのですけれども、

ジヨバンニ「ええ、ありがとうございます。」

語り と云つて遠慮しましたら、鳥捕りは、こんどは向うの席の、鍵をもった人に出しました。すうと

燈台守「いや、商売ものを貰つちやすみませんな。」

語り その人は、帽子をとりました。

鳥捕り「いいえ、どういたしまして。どうです、今年の渡り鳥の景気は。」

燈台守「いや、すてきなもんですよ。一昨日の第二限ころなんか、なぜ燈台の灯を、規則以外に開けさせると、あつちからもこつちからも、電話で故障が来ましたが、なあに、こつちがやるんじゃないやなくて、渡り鳥どもが、まつ黒にかたまつて、あかしの前を通るので、仕方ありませんや。わたしあ、べらぼうめ、そんな苦情は、おれのどこへ持つて来たつて仕方がねえや、ばさばさのマントを着て脚と口との途方もなく細い大将へやれつて、斯う云つてやりましたがね、はつは。」

語り すすまがなくなつたために、向うの野原から、ぱつとあかりが射して来ました。

カムパネラ「鷺の方はなぜ手数なんですか。」

語り カムパネラは、さつきから、訊こうと思つていたのです。

鳥捕り「それはね、鷺を喰べるには、」

語り 鳥捕りは、こつちに向き直りました。

鳥捕り「天の川の水あかりは、十日もつるして置かかね、そうでなければ、砂に三四日うずめなければいけないんだ。そうすると、水銀がみんな蒸発して、喰べられるようになるよ。」

カムパネラ「こいつは鳥じゃない。ただのお菓子でしょう。」

語り 「やつぱりおなじことを考へていたとみえて、カムパネラが、思い切つたというように、尋ねました。鳥捕りは、何だ大へんあわてた風で、鳥捕り「そうそう、ここで降りなけあ。」

語り と云ひながら、立つて荷物をとつたと思うと、もう見えなくなつていました。

ジョバンニ・カムパネルラ「どこへ行ったんだろう。」

語り 二人は顔を見合せましたら、燈台守は、にやにや笑って、少し伸びあがるようにしながら、二人の横の窓の外をのぞきました。二人もそつちを見ましたら、たったいまの鳥捕りが、黄いろと青じろの、うつくしい燐光を出す、いちめんのかわらははこぐさの上に立って、まじめな顔をして両手をひろげて、じつとそらを見ていたのです。

ジョバンニ「あすこへ行つてる。ずいぶん奇体だねえ。きつとまた鳥をつかまえるところだねえ。汽車が走って行かないうちに、早く鳥がおけるといいな。」

語り と云つた途端、がらんとした枯梗いろの空から、さつき見たような鷺が、まるで雪の降るように、ぎやあぎやあ叫びながら、いっぱい舞いおりて来ました。するとあの鳥捕りは、すっかり注文通りだというようにほくほくして、両足をかけり六十度を開いて立って、鷺のちぢめて降りて来る黒い脚を両手で片っ端から押えて、布の袋の中に入れてのぞきました。すると鷺は、蛍のように、袋の中でしばらく、青くペかペか光つたり消えたりしていましたが、おしまいとうとう、みんなぼんやり白くなって、眼をつぶるのです。

ところが、つかまえられる鳥よりは、つかまえられないで無事に天の川の砂の上に降りるものの方が多かったのです。それは見ていると、足が砂へつくや否や、まるで雪の融けるように、縮まって扁べつたくなつて、間もなく熔鉱炉から出た銅の汁のように、砂や砂利の上にひろがり、しばらくは鳥の形が砂についているのですが、それも二三度明るくなったり暗くなったりしているうちに、もうすっかりまわりと同じいろになつてしまつてました。

語り 鳥捕りは二十疋ばかり、袋に入れてしまうと、急に両手をあげて、兵隊が鉄砲弾にあたつて、死ぬときのような形をしました。と思つたら、もうそこに鳥捕りの形はなくなつて、知つて鳥捕り「ああせいせいした。どうもからだに恰度合うほど稼いでいるくらい、いいことはありませんな。」

語り もうききおぼえのある声が、ジョバンニの隣りにしました。見ると鳥捕りは、もうを口にして来た鷺を、きちんとそろえて、一つずつ重ね直しているのです。

ジョバンニ「どうしてあすこから、いっぺんにここへ来たんですか。」
語り ジョバンニが、なんだかあたりまえのような、あたりまえでないような、おかしな気がして聞きました。

鳥捕り「どうしてつて、来ようとしたから来たんです。ぜんたいあなた方は、どちらからおいでですか。」

語り ジョバンニは、すぐ返事しようと思いましたが、さあ、ぜんたいどこから来たのか、もうどうしても考えつきませんでした。カムパネルラも、顔をまっ赤にして何か思い出そうとしているのです。

鳥捕り「ああ、遠くからですね。」
語り 鳥捕りは、わかつたというように雑作なくうなずきました。

九、ジョバンニの切符

老人 鳥捕り ジョバンニ

老人「もうここらは白鳥区のおしまいです。ごらんなさい。あれが名高いアルビレオの観

測所です。」

鳥取り

語り 窓の外の、まるで花火でいっぱいのような、あまの川のまん中に、黒い大きな建物が四棟ばかり立って、その一つの平屋根の上に、眼もさめるような、青宝玉と黄玉の大きな二つのすきとおった球が、輪になってしずかにくるくるとまわっていました。黄いろのがだんだん向うへまわって行って、青い小さいのがこっちへ進んで来、間もなく二つののは、重なり合って、きれいな緑いろの両面凸レンズのかたちをつくり、それもだんだん、まん中がふくらみ出して、とうとう青いのは、すっかりトパースの正面に来ましたので、緑の中心と黄いろな明るい環とができました。それがまだだんだん横へ外れて、前のレンズの形を逆に繰り返し、とうとうすつとはなれて、サファイアは向うへめぐり、黄いろのはこっちへ進み、また丁度さつきのような風になりました。銀河の、かたちもなく音もない水にかこまれて、ほんとうにその黒い測候所が、睡り始めるように、しずかによこたわったのです。

老人 「あれは、水の速さをはかる器械です。水も……。」鳥捕りが去いかげなとき、

語り 三人の席の横に、赤い帽子をかぶったせいの高い車掌が、いつかまっすぐに立って、

語り 鳥捕りは、だまってかくしから、小さな紙きれを出しました。

語り 車掌はちよつと見て、すぐ眼をそらして、(あなた方のは?) というように、指をうごかしながら、手をジョバンニたちの方へ出しました。

ジョバンニ「さあ、」

語り ジョバンニは困って、もじもじしていましたが、カムパネルラは、わけもないという風で、小さな鼠いろの切符を出しました。ジョバンニは、すっかりあわててしまつて、もしか上着のポケットにでも入っていたかとおもいながら、手を入れて見ましたら、何か大きな畳んだ紙きれにあたりました。こんなもの入っていたらうかと思つて、急いで出してみしたら、

語り それは四つに折つたはがきぐらいの大きさの緑いろの紙でした。車掌が手を出しているものですから何でも構わない、やっちなまと思つて渡しましたら、車掌はまっすぐに立ち直つて町寧にそれを開いて見ていました。そして読みながら上着のぼたんやなんか

しきりは直したりしてしまいましたし、燈台看守も下からそれを熱心にのぞいていましたから、

ジョバンニはたしかにこれは証明書か何かだつたと考えて、胸が熱くなるような気がしました。

車掌「これは三次空間の方からお持ちになつたのですか。」

語り 車掌がたずねました。

ジョバンニ「何だかわかりません。」

語り もも大丸丸だと安心しながらジョバンニはそつちを見あげてくつろぎ笑い直した。

車掌「よろしゅうございます。南十字へ着きますのは、次の第三時ころになります。」

語り 車掌は紙をジョバンニに渡して向うへ行きました。

語り カムパネルラは、その紙切れが何だつたか待ち兼ねたというように急いでのできこみました。ジョバンニも早く見れたかつたのです。

語り ところがそれはいちめん黒い唐草のような模様の中に、おかしな十ばかりの字を

あつこ

あつこ

語り した日俄のところに、つやつやした黒い髪の六つばかりの男の子が赤いジャケツのぼたんもかけずのびびくりしたような顔をしてがたがたふるえてはだしで立っていました。

語り 隣には黒い洋服をきちんと着たせい高い青年がはんに風が吹かれてやきの木のような姿勢で、男の子の手をつかりまいて立っていました。

語り 青年のうしろにものどり十二ばかりの眼の茶いろな可愛らしい女の子が黒い外套を着て青年の腕にすがって不思議そう窓の外を見ているのです。

青年「ああ、ここはランカシャイヤだ。いや、コンネクテカット州だ。いや、あ、ぼくたちはそらへ来たのだ。わたしたちは天へ行くのです。ごらんなさい。あのしるしは天上のしるしです。もうなんにもこわいことありません。わたくしたちは神さまに召されているのです。」

語り 黒服の青年はよろこびにかがやいてその女の子に云いました。けれどもなぜかま顔を深く皺を刻んで、それ大へんつかれておらしく、無理に笑いながら男の子をジヨバンニのとなりに座らせました。

語り それから女の子にやさしくカムパネルラのとりの席を指さしました。女の子はすなおにそこへ座って、きちんと両手を組み合せました。

男の子「ぼくおねえさんのとへ行くんだよう。」

語り 腰掛けたばかりの男の子は顔を変にして燈台看守の向うの席に座ったばかりの青年に云いました。青年は何とも云えず悲しそうな顔をして、じつとその子の、ちぢれてぬれた頭を見ました。女の子は、いきなり両手を顔にあててしく泣いてしまいました。

青年「お父さんやきよねえさんはまだいろいろお仕事があるのです。けれどももうすぐあとからいらつしやいます。それよりも、おっかさんはどんなに永く待っていらつしや

おでしよう。わたしの大事なタダシはいまだんな歌をうたっているだろう、雪の降る朝にみんなと手をつないでぐるぐるにわたこのやぶをまわってあそんでいるだろうか考えた

りほんとうに待つて心配していらつしやるんですから、早く行っておっかさんにお目にかかりましようね。」

男の子「うん、だけど僕、船に乗らなけあよかつたなあ。」

青年「ええ、けれど、ごらんなさい、をらどうすあの立派な川、ね、あそこはあの夏中、ツインクル、ツインクル、リトル、スターをうたつてやすむとき、いつも窓から

ぼんやり白く見えていたでしょう。あそこです。ね、きれいでしょう、あんなに光っています。」

語り 泣いていた姉もハンケチで眼をふいて外を見ました。青年は教えるようにそつと姉弟をまた云いました。

青年「わたしたちはもうなんでもかなしいことないのです。わたしたちはこんないいところを旅して、じき神さまのとへ行きます。そこならもうほんとう明るくて匂がよくて立派な人たちでいっぱいいます。わたしたちの代りにボートへ乗れた人たちは、きつとみんな助けられて、三配して待つているあめいのお父さんやお母さんや自分のお家へ行くのです。さあ、もうじきですから元氣を出しておもしろくうたつて行きましよう。」

まろく

えええ

氷山

ウズし

道

泳ぐ

いざ

たっ

語り 青年は男の子のぬれたような黒い髪をなで、みゆなを慰めながら、自分もだんだん顔いろがかがやいて来ました。

語り 燈台守「あなた方はどちらからいらつしやったのですか。どうなすつたのですか。」
語り さっきの燈台看守がやつと少しわかつたように青年にたずねました。青年はかすかにわらいました。

青年「いえ、氷山にぶつつかって船が沈みましてね、わたしたちはこちらのお父さんが急な用で二ヶ月前一足さきに本国へお帰りになったので、あとから発つたのです。私は大学へはいって、家庭教師にやとわれていたのです。ところがちようど十二日目、昨日が昨日のあたりです、船が氷山にぶつつかって一ぺんに傾きもう沈みかけました。月のあかりはぼんやりありましたが、霧が非常に深かったのです。ところがボートは左舷の方半分はもうだめになっていましたから、とてもみんなは乗り切れないのです。もうそのうちにも船は沈みますし、私は必死となって、どうか小さな人たちを乗せて下さいと叫びました。近くの人たちはすぐボートを開いて、うちで子供たちのために祈つて呉れました。けれどもボートまでのところにはまだ小さな子どもたちや親たちやなんか居て、とても押しつける勇気がなかったのです。それでもわたくしはどうしてこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いましたが、前にいる子供らを押しつけようとはしませんでした。けれどもまたそんなにして助けてあげるよりは、このまま神のお前にみんなで行く方がほんとうにこの方たちの幸福だとも思いました。それからまたその神にそむく罪はわたくしひとりです。ぜひとも助けてあげようと思いましたが、けれどもどうして見ている、それができないのでした。子どもらばかりボートの中へはなしてやってお母さんが狂気のようにキスを送りお父さんがかなしいのをじつとこらえてまっすぐ立っているなどとてもう腸もちぎれるようでした。そのうち船はもうずんずん沈みますから、私はもうすっかり覚悟してこの人たち二人を抱いて、浮べるだけは浮ぼうとかたまって船の沈むのを待っていました。誰が投げたかライフブイが一つ飛んで来ましたが、これも滑ってずうつと向うへ行つてしまいました。私は一生けん命で甲板の格子になったとこをはなして、三人それにしつかりとりつきました。どこからともなく約二十分空白の響の音があがりました。たちまちみんなはいろいろな国語で一ぺんにそれをうたいました。そのとき俄かに大きな音がして私たちは水に落ちもう渦に入つたと思いがらしつかりこの人たちをだいてそれからぼうつとしたと思つたら、ここへ来ていたのです。この方たちのお母さんは一昨年没くなられました。ええボートはきつと助かつたにちがいありません、何せよほど熟練な水夫たちが漕いですばやく船からはなれていきましたから。」

語り そこらから小さないのりの声が聞え、ジョバンニもカムパネルラもいまままで忘れていたいろいろのことをぼんやり思い出して眼が熱くなりました。

ジョバンニ「ああ、その大きな海はパシフィックというのではなかったらうか。その氷山の流れる北のはての海で、小さな船に乗って、風や凍りつく潮水や、烈しい寒さとたたかつて、なれかが生けんめいはたらいっている。ぼくはそのひとにほんとうに気の毒で、そしてすまないような気がする。ぼくはそのひとのさいわいのためにいつたいどうしたらいいのだろう。」

語り ジョバンニは首を垂れて、すっかりふさぎ込んでしまいました。
燈台守「なにがしあわせかわからないです。ほんとうにどんなつらいことでもそれがただ

抱
燈台守

3
11
リニコと
鳥たよ

しいみちを進む中でできごとなら峠の上りも下りもみんなほんとうの幸福に近づく一あしずつですから。」

語り 燈台守がなぐさめていました。

青年「ああそうです。ただいちばんのさいわいに至るためにいろいろのかなしみもみんなおぼしめします。」

語り 青年が祈るようにそう答えました。

語り そしてあの姉弟はもうつかれてめいめいぐったり席によりかかって睡っていました。さつきのはだしだった足にはいつか白い柔らかな靴をはいていたのです。

語り ごとごとごとと汽車はきらびやかな燐光の川の岸を進みました。向うの方の窓を見ると、野原はまるで幻燈のようでした。百も千もの大小さまさまの三角標、その大きなものの上には赤い点をうった測量旗も見え、野原のはてはそれらがいちめん、たくさんたくさん集ってぼおっと青白い霧のよう、そこからかまたはもっと向うからかときどきさまさまの形のぼんやりした狼煙のようなものが、かわるがわるきれいな桔梗いろのそらにうちあげられるのです。そしてそのすきとおった奇麗な風は、ばらの匂いでいっぱいでした。

燈台守 「いかがですか。こういう苹果はおはじめてでしよう。」

語り 向うの席の燈台看守がいつか黄金と紅でうつくしくいろどられた大きな苹果を落さないように両手で膝の上にかかえていました。

青年「おや、どつから来たのですか。立派ですねえ。ここらではこんな苹果ができるのですか。」

語り 青年はほんとうにびつくりしたらしく燈台看守の両手にかえられた一もりの苹果を眼を細くしたり首をまげたりしながらわれを忘れてながめていました。

燈台守 「いや、まあおとり下さい。どうか、まあおとり下さい。」

語り 青年は一つとつてジョバンニたちの方をちよつと見ました。

燈台守 「さあ、向うの坊ちゃんがた。いかがですか。おとり下さい。」

語り ジョバンニは坊ちゃんといわれたのです。こししゃくにさわってだまっていました。がカムパネラは

カムパネラ「ありがとうございます、」

語り と云いました。

語り すると青年は自分でとつて一つずつ二人に送ってよこしましたのでジョバンニも立ってありがとうと云いました。

語り 燈台看守はやつと両腕があいたのでこんどは自分で一つずつ睡っている姉弟の膝にそつと置きました。

青年「どうもありがとうございます。どこでできるのですか。こんな立派な苹果は。」

語り 青年はつくづく見ながら云いました。

燈台守 「この辺ではもちろん農業はいたしますけれども大ていひとりでにいいものができるとような約束になつて居ります。農業だつてそんなに骨は折れはしません。たいてい自分の望む種子さえ播けばひとりでいんどんできます。米だつてパシフィック辺のように穀もないし十倍も大きくて匂もいいのです。けれどもあなたがたのいらつしやる方なら農業はもうありません。苹果だつてお菓子だつてかすが少しもありませんからみんなそのひと

鳥たよ
女子
女子
女子
女子

女

語り) そして青い橄欖の森が見えない天の川の向うにさめざめと光りながらだんだんうしろの方へ行ってしまいいそこら流れて来るあやしい楽器の音ももう汽車のひびきや風の音にすり耗らされてずうつとかすかになりました。

男の子「あ孔雀が居るよ。」

女の子「ええたくさん居たわ。」

語り) 女の子がこたえました。

語り) ジョバンニはその小さく小さくなつていまはもう一つの緑いろの貝ぼたんのように見える森の上にさつさつと青じろく時々光つてその孔雀がはねをひろげたりとじたりする光の反射を見ました。

カムパネラ「そうだ、孔雀の声だつてさつき聞えた。」

語り) カムパネラがかおる子に云いました。

女の子「ええ、三十疋ぐらいはたしかに居たわ。ハープのように聞えたのはみんな孔雀よ。」

語り) 女の子が答えました。ジョバンニは俄かに何とも云えずかなしい気がして思わず

「カムパネラ、ここからはねおりて遊んで行こうよ。」とこわい顔をして云おうとしたくらいでした。

語り) 川は二つにわかれました。そのまっくらな島のまん中に高い高いやぐらが一つ組まれてその上に一人の寛い服を着て赤い帽子をかぶった男が立っていました。

語り) 両手に赤と青の旗をもつてそれを見上げて信号して居るのでした。ジョバンニが見ている間その人はしきりに赤い旗をふっていました。俄かに赤旗をおろしてうしろにかくすようにし青い旗を高く高くあげてまるでオーケストラの指揮者のように烈しく振りました。

語り) すると空中にざあつと雨のような音がして何かまっくらなものがかたまりも

いくかたまりも鉄砲丸のように川の向うの方へ飛んで行くのでした。ジョバンニは思わず窓からからだを半分出してそつちを見あげました。美しい美しい桔梗いろのがらんとした空の下を実に何万という小さな鳥どもが幾組も幾組もめいめいせわしくせわしく鳴いて通つて行くのでした。

ジョバンニ「鳥が飛んで行くな。」

語り) ジョバンニが窓の外で云いました。

カムパネラ「どら、」

語り) カムパネラもそれを見ました。

語り) そのときあのやぐらの上のゆるい服の男は俄かに赤い旗をあげて狂気のようにぶりうごかしました。

語り) するとぴたつと鳥の群は通らなくなりそれと同時にびしやあんという潰れたような音が川下の方で起つてそれからしばらくしんどしました。

語り) と思つたらあの赤帽の信号手がまた青い旗をふつて叫んでいたのです。

鳥捕り「いまこそわたれわたり鳥、いまこそわたれわたり鳥。」

語り) その声もはつきり聞えました。それといつしよにまた幾万という鳥の群がそらをまっすぐにかけたのです。

語り) 二人の顔を出しているまん中の窓からあの女の子が顔を出して美しい頬をかがや

語り

かせながらそらを仰ぎました。

女の子「まあ、この鳥、たくさんですわねえ、あらまあそのきれいなこと。」

語り 女の子はジョバンニにはなしかけましたけれどもジョバンニは生意気ないやだと思いつながらだまって口をむすんでそらを見あげていました。女の子は小さくほっと息を吐きだまって席へ戻りました。カムパネルラが気の毒そうに窓から顔を引つ込めて地図を見ていました。

女の子「あの人鳥へ教えてるんでしょうか。」

語り 女の子がそつとカムパネルラにたずねました。

カムパネルラ「わたり鳥へ信号してるんです。きつとどこからかのろしがあがるためですよ。」

語り カムパネルラが少しおぼつかないように答えました。そして車の中はしいんと静かになった。ジョバンニはもう頭を引つ込めたかったのですけれども明るいとこへ顔を出すのがつらかったのだ。だまってこらえてそのまま立ち口笛を吹いていました。

ジョバンニ「どうして僕はこんなにかなしのたろう。僕はもつところもちをきれいに大きくもたなければいけない。あの岸のうしろの向うにまるをけむりのような小さな青い火が見える。あれはほんとうにさかすかです。僕はあれをよく見てところもちをしずめるんだ。」

語り ジョバンニは熱くて痛いあたまを両手で押さえるようにしてそつちの窓を見ました。ジョバンニ「ああほんとうにさかすかでも僕といっしょに行くひとはないだろうか。カムパネルラだつてあんな女の子とおもしろそうに談話しているし僕はほんとうにつらいなあ。」

語り ジョバンニの眼はまた涙でいっぱいになり天の川もまるで遠くへ行ったようにぼんやり白く見えるだけでした。

語り そのとき汽車はだんだん川からはなれて崖の上を通るようになりました。向う岸もまた黒いいろの崖が川の岸を下流に下るにしたがってだんだん高くなって行くのでした。語り そしてちらつと大きなどうもろこしの木を見ました。その葉はぐるぐるに縮れ葉の下にはもう美しい緑いろの大きな苞が赤い毛を吐いて真珠のような実もちらつと見えたのでした。それはだんだん数を増して来てもういまは列のように崖と線路との間にならび

思わずジョバンニが窓から顔を引つ込めて向う側の窓を見ましたときは美しいその野原の地平線のはてまでその大きなどうもろこしの木がほとんどの間に植えられてさやさや風にゆらぎその立派なちぢれた葉のさきからはまるでひるの間にいっぱい日光を吸った金剛石のように露がいつぱいについて赤や緑やきらきら燃えて光っているのです。カムパネルラが「あれどうもろこしだねえ」とジョバンニは去いましたけれどもジョバンニはどうしても気持がなおりませんでしたからただぶつきり棒に野原を見たまま「そうだろう」と答えました。そのとき汽車はだんだんしずかになっていくつかのシグナルとてんてん器の灯を過ぎ小さな停車場にとまりました。

語り その正面の青じろい時計はかつきり第二時を示しその振子は風もなくなり汽車も

うごかずしずかなしずかな野原のなかにカチツカチツと正しく時を刻んで行くのでした。語り そしてまったくその振子の音のたえまを遠くの遠くの野原のはてから、かすかなかすかな旋律が糸のように流れて来るのでした。

老人
カチツカチツ
かすかな

女の子「新世界交響楽だわ。」

語り 姉がひとりごとのようにこつちを見ながらそつと云いました。全くもう車の中ではあの黒服の丈高い青年も誰もみんなやさしい夢を見ていたのでした。

ジョバンニ「こんなはずかないいところで僕はどうしてもつと愉快になれないだろう。どうしてこんなにひとりさびしいのだろう。けれどもカムパネルラなんかあんまりひどい、僕といっしょに汽車に乗っていないがまるであんな女の子とばかり談しているんだもの。僕はほんとうにつらい。」

語り ジョバンニはまた両手で顔を半分かくすようにして向うの窓のそとを見つめていました。すきとおった硝子のような笛が鳴って汽車はずかに動き出し、カムパネルラもさびしそくに星めぐりの口笛を吹きました。

老人「ええ、ええ、もうこの辺はひどい高原ですから。」

語り うしろの方で誰かとしよりらしい人のいま眼がさめたという風ではきはき談している声がしました。

老人「とうもろこしだつて棒で二尺も孔をあけておいてそこへ播かないと生えないんです。」

青年「そうですか。川まではよほどありましたよかねえ、」

老人「ええええ河までは二千尺から六千尺あります。もうまるでひどい峡谷になつてい

んです。」

語り そうそうここはコロラドの高原じゃなかつたらうか、ジョバンニは思わずそう思

いました。

語り カムパネルラはまださびしそくにひとり口笛を吹き、女の子はまるで絹で包んだ

苹果のような顔いろをしてジョバンニの見る方を見ているのでした。

語り 突然とうもろこしがなくなつて巨きな黒い野原がいつぱいにひらけました。新世界交響楽はいよいよはつきり地平線のはてから湧き、そのまっ黒な野原のなかを一人のイン

デアンが白い鳥の羽根を頭につけ、たくさんの石を腕と胸にかざり小さな弓に矢を番えて一目散に汽車を追つて来るのでした。

女の子「あら、インデアンですよ。インデアンですよ。ごらんなさい。」

語り 黒服の青年も眼をさしました。ジョバンニもカムパネルラも立ちあがりました。

女の子「走つて来るわ、あら、走つて来るわ。追いかけているんでしよう。」

青年「いいえ、汽車を追つてるんじゃないんですよ。狼をやるか踊るかしてるとですよ。」

語り 青年はいまどこに居るか忘れたという風にポケットに手を入れて立ちながら云いました。

語り まったくインデアンは半分は踊っているようでした。第一かけるにしても足のふみようがもつと経済もどれ本気にもなれそうでした。にわかにくつきり白いその羽根は前の方へ倒れるようになりインデアンはびたつと立ちどまつてすばやく身を空にひきました。そこから一羽の鶴がふらふらと落ちて来てまた走り出したインディアンの大きくひろげた両手に落ちこみました。インデアンはうれしそくに立ってわらいました。

語り そしてその鶴をもつてこつちを見ている影ももうどんどん小さく遠くなり電しんばしらの碑子がきらつきらつと続いて二つばかり光つてまたとうもろこしの林になつてし

まいました。こつち側の窓を見ますと汽車はほんとうに高い高い崖の上を走っていてその谷の底には川がやっぱり幅ひろく明るく流れていたので。

老人「ええ、もうこの辺から下りです。何せこんどは一ぺんにあの水面までおりて行くんですから容易じゃありません。この傾斜があるもんですから汽車は決して向うからこつちへは来ないんです。そら、もうだんだん早くなったでしょう。」

語り さっきの老人らしい声が云いました。

語り どんどんどんどん汽車は降りて行きました。崖のはじに鉄道がかかるときは川が明るく下にのぞけたのです。

語り ジョバンニはだんだんころもちが明るくなって来ました。汽車が小さな小屋の前を通ってその前にしよんぼりひとりの子供が立ってこつちを見ているときなどは思わずほうと叫びました。

語り どんどんどんどん汽車は走って行きました。室中のひとたちは半分うしろの方へ倒れるようになりながら腰掛にしっかりとみついでいました。

語り ジョバンニは思わずカムパネラとわらいました。もうそれも天の川は汽車のすぐ横手をいままでよほど激しく流れて来たらしくときどきちらちら光ってながれているでした。うすあかい河原なでこの花があちこち咲いていました。汽車はようやく落ちて着いたようにゆつくりと走っていました。

語り 向うとこつちの岸に星のかたちとつるはしを書いた旗がたっていました。

ジョバンニ「あれ何の旗だろうね。」

語り ジョバンニがやつとものを云いました。

カムパネラ「さあ、わからないねえ、地図にもないんだもの。鉄の舟がおいてあるねえ。」

ジョバンニ「ああ。」

女の子「橋を架けるとこじやないんでしょうか。」

語り 女の子が云いました。

カムパネラ「あああれ工兵の旗だねえ。架橋演習をしてるんだ。けれど兵隊のかたちが見えないねえ。」

語り その時向う岸ちかくの少し下流の方で見えない天の川の水がざらつと光って柱のように高くはねあがりどおと烈しい音がしました。

カムパネラ「発破だよ、発破だよ。」

語り カムパネラはこおどりました。

語り その柱のようになった水は見えなくなり大きな鮭や鱒がきらつきらつと白く腹を光らせて空中に抛り出されて円い輪を描いてまた水に落ちました。

語り ジョバンニはもうはねあがりたいくらい気持が軽くなって云いました。

ジョバンニ「空の工兵大隊だ。どうだ、鱒やなんかまるでこんなになってはねあげられたねえ。僕こんな愉快な旅はしたことない。いいねえ。」

カムパネラ「あの鱒なら近くで見たらこれくらいあるねえ、たくさんさかな居るんだな、この水の中に。」

女の子「小さなお魚もいるんでしょうか。」

語り 女の子が談につり込まれて云いました。

ジョバンニ「居るんでしよう。大きなのが居るんだから小さいのもいるんでしよう。けれど遠くだからいま小さいの見えなかったねえ。」

語り ジョバンニはもうすっかり機嫌が直って面白そうにわらって女の子に答えました。男の子「あれきつと双子のお星さまのお宮だよ。」

語り 男の子がいきなり窓の外をさして叫びました。右手の低い丘の上に小さな水晶でもこさえたような二つのお宮がならんで立っていました。

ジョバンニ「双子のお星さまのお宮って何だい。」女の子「あたし前になんべんもお母さんから聞いたわ。ちゃんと小さな水晶のお宮で二つならんでいるからきつとそうだよ。」

ジョバンニ「はなしてごらん。双子のお星さまが何したっての。」男の子「ぼくも知ってらい。双子のお星さまが野原へ遊びにでてからすと喧嘩したんだらう。」

女の子「そうじゃないわよ。あのね、天の川の岸にね、おつかさんお話をすつたわ、：」男の子「それから彗星がギィギーフィーフィーて云って来たねえ。」

女の子「いやだわたあちゃんそうじゃないわよ。それはべつの方だよ。」男の子「するとあそこにいま笛を吹いて居るんだらうか。」

男の子「いま海へ行つてらあ。」女の子「いけないわよ。もう海からあがつていらつしやつたのよ。」

男の子「そりそう。ぼく知つてらあ、ぼくおはなししよう。」

語り 川の向う岸が俄かに赤くなりました。楊の木も何かも黒にすかし出され見えない天の川の波もときどきちらちら針のように赤く光りました。また向う岸の野原に大きなまつ赤な火が燃されその黒いけむりは高く結梗いろの煙たけりな天をも焦がしそ

うでした。ルビーよりも赤くすきとおおりチウムよりもうつくしく酔つたようはなを燃や

すきと燃えているのでした。男の子「あれは何の火だろう。あれは赤く光る水は何を燃やせばできあがるか。」

語り ジョバンニ「あれは何の火だろう。あれは赤く光る水は何を燃やせばできあがるか。」

女の子
ジョバンニ

女の子「そうよ。だけどいい虫だわ、お父さん斯う云ったのよ。むかしのバルドラの野原に一ぴきの蝸がいて小さな虫やなんか殺してたべて生きていたんですって。あるとある日、いたちに見附かって食べられそうになったんですって。さそりは一生存命通げて逃げたけどとうとういたちを押えられそうになったわ。そのとき、きぬの前井戸があつてその中に落ちてしまつたわ、もうどうしてもあがられないで、さそりは溺れはじめたのよ。そのときさそりは斯う云つてお祈りしたというの、

ああ、わたしはいままでいくつのものの命をとつたかわからない、そしてその私がこんどいたちにとられようとしたときは、あんなに一生けん命にげた。それでもとうとうこんなになつてしまつた。あんなにもあてにならない。どうしてわたしはわたしのからだをだまつていたちと呉れてやらなかつたらう。そして、わたしも一日生きのびたらうに。どうか神さま。私の心をごらん下さい。こんなにむなく命をすてどうかこの次には、まことのみんなの幸のために私のからだをおつかい下さい。つて云つたというの。そして、いつか蝸はじぶんのからだがあつて赤なうつくしい火になつて燃えて、そのやみを照らしているのを見たつて。いまでも燃えてるつてお父さん仰つたわ。ほんとうにあの火それだわ。」

ジョバンニ「そうだ。見たまえ。そこらの三角標はちようどさそりの形にならんでいるよ。」

語り ジョバンニは、まづ、その大きな火の向うに三つの三角標が、ちようどさそりの腕のようにこつちに五つの三角標が、さそりの尾やかぎのようにならんでいるのを見ました。そして、ほんとうに、そのまづ赤なうつくしいさそりの火は、音なくあかるくあかるく燃えたのです。

語り その火がだんだんうしろの方になるにつれて、みんなは何とも云えずにぎやかなさ、まざまの楽の音や草花の匂のようなもの、口笛や人々のざわざわ云う声やらを聞きました。それは、さそりもかくに町を、何があつて、そこをお祭でもある、というふうな気がするのでした。

男の子「ケンタウル露をふらせ。」

語り いきなりいままで睡つていたジョバンニのとなりの男の子が向うの窓を見ながら叫んでいました。

語り ああ、そこにはクリスマスストリイのようにまづ青な唐櫓も、みの木があつて、その中に、はたらくさんのたくさんの豆電燈が、まるき千の螢でも集つたようになっています。

ジョバンニ「ああ、そうだ、今夜ケンタウル祭だねえ。」

カムパネルラ「ああ、ここはケンタウルの村だよ。」

語り カムパネルラがすぐ云いました。「以下原稿一枚？なし」

男の子「ボール投げなら僕決してはずさない。」

語り 男の子が木威張りで云いました。

青年「もうじきサウザンクロスです。おるる支度をして下さい。」

語り 青年がみんなに云いました。

男の子「僕も少し汽車へ乗つてるんだよ。」

語り 男の子が云いました。

語り カムパネルラのとなりの女の子は、さそりも立って支度をはじめましたけれども、さそりも

ト
ん

初

降
キヤ

青年「~~ぼく~~ジョバンニたちとわかれたくないようなようすでした。」

語り 青年はきちつと口を結んで男の子を見おろしながら云いました。男の子「厭いやだ。僕も少し汽車へ乗ってから行くんだい。」

語り ジョバンニがこらえ兼ねて云いました。ジョバンニ「僕たちと一緒にいっしょに乗って行こう。僕たちどこまでだつて行ける切符きっぷ持ってるんだ。」

女の子「だけどあたしたちももうこゝろ降りなけあいけないのよ。（二）天上へ行くところなんだから。」

語り 女の子がさびしそうに云いました。

ジョバンニ「天上へなんか行かなくなつていいじゃないか。ぼくたちここで天上よりもつといいところをこさえなけあいけないって僕の先生が云つたよ。」

女の子「だつておつ母さんも行ってらっしゃるしそれに神さまが仰おほっしゃるんだわ。」

ジョバンニ「そんな神さまうその神さまだい。」

女の子「あなたの神さまうその神さまよ。」

ジョバンニ「そうじゃないよ。」

青年「あなたの神さまうその神さまですか。」

語り 青年は笑いながら云いました。

ジョバンニ「ぼくほんとうはよく知りません、けれどもそんなんでなしにほんとうのたつた一人の神さまです。」

青年「ほんとうの神さまはもちろんたつた一人です。」

ジョバンニ「ああ、そんなんでなしにたつたひとりのほんとうの神さまです。」

青年「だからそうじゃありませんか。わたくしはあなた方がいまにそのほんとうの神さまの前にわたくしたちとお会いになることを祈ります。」

語り 青年はつつましく両手を組みました。女の子もちやうどその通りにしました。みんなほんとうに別れが惜おししうその顔いろも少し青ざめて見えました。ジョバンニはあぶなく声をあげて泣き出そうとしました。

青年「さあもう支度はいいんですか。じきサウザンクロスですから。」

語り ~~ああ~~そのときでした。見えない天の川のずうつと川下に青や橙だいだいやもうあらゆる光でちりばめられた十字架じゅうじかがまるで一本の木という風に川の中から立ってかがやきその上には青じろい雲がまるい環わになって後光ごこうのようにかかっているのです。

語り 汽車の中がまるでざわざわしました。みんなあの北の十字のときのようにまっすぐに立ってお祈りをはじめました。あつちにもこつちにも子供が瓜うりに飛びついたときのようによろこびの聲や何なにとも云いひようない深いつつましいためいきの音ばかりきこえました。そしてだんだん十字架は窓の正面になりあの荳果りんごの肉のような青じろい環の雲もゆるやかにゆるやかに繞めぐっているのが見えました。

人びと「ハルレヤハルレヤ。」

語り 明るくたのしくみんなの声はひびきみんなはそのその遠くから（三）うめたいそのもの遠くからすきとおった何とも云えずさわやかなラッパの声をききました。

語り　そしてたくさんのシグナルや電燈の灯のなかを汽車はだんだんゆるやかになりとうとう十字架のちようどま向いに行つてすつかりとまりました。

青年「さあ、下りるんですよ。」

語り　青年は男の子の手をひきだしたの向うの出口の方へ歩き出しました。

女の子「じゃさよなら。」

語り　女の子がふりかえつて二人に云いました。

ジヨバンニ「さよなら。」

語り　ジヨバンニはまるで泣き出したいのをこらえて怒つたようにぶつきりに云いました。女の子はいかにもつらそうに眼を大きくしても一度こつちをふりかえつてそれからあとはもうだまつて出て行つてしまいました。汽車の中はもう半分以上も空いてしまい、俄かにがらんとして、さびしくなり、風がいつぱいに吹き込みました。

語り　そして見ているみんなはつつましく列を組んであの十字架の前の天の川のなごさにひざまずいていました。そして見えない天の川の水をわたつてひとりの神々しい

白いきもの人が手をのばしてこつちへ来るのを二人は見ました。

語り　けれどもそのときは、もう硝子の呼子は鳴らされ、汽車はうごき出し、と思ううちに銀いろの霧が川下の方からすうつと流れて来て何も見えなくなりました。ただたくさんのくるみの木が葉をさんさんと光らして霧の中に立ち黄金の円光をもつた電気栗鼠が可愛い顔をその中からちらちらのぞいているだけでした。

語り
くさくさの木

語り　そのときすうつと霧がはれかかりました。どこかへ行く街道らしい小さな電燈の行列にいた通りがありました。それはしばらく線路に沿つて進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通つて行くときはその小さな豆いろの火はちようど挨拶でもするよ

うにほかつと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。

語り　ふりかえつて見るとさつき千字架はすつかり小さくなってしまひんどうはもうそのま

まじまじと胸にも吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだ

ひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行つたのかぼんやりして見分けられませんでした。

語り　ジヨバンニはああと深く息しました。

ジヨバンニ「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に

行く。僕はもうあのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕の中からだ

なんか百べん灼いてもかまわない。」

カムパネルラ「うん。僕だつてそうだ。」

語り　カムパネルラはきれいな涙がうかんでいました。

ジヨバンニ「けれどもほんとうのさいわいは一体何だろう。」

語り　ジヨバンニが云いました。

カムパネルラ「僕わからない。」

語り　カムパネルラがぼんやり云いました。

ジヨバンニ「僕たちすっかりやろうねえ。」

語り　ジヨバンニが胸いっぱい新しい力が湧くようにふうと息をしながら云いました。

カムパネルラ「あ、あすこ石炭袋だよ。そらの孔だよ。」

牛乳屋「何のご用ですか。」

ジョバンニ「今日牛乳がぼくのところへ来なかったのですが」

牛乳屋「あ済みませんでした。」

語り その人はすぐ奥へ行って一本の牛乳瓶ぎゅうにゅうびんをもって来てジョバンニに渡しながらまた云いました。

牛乳屋「ほんとうに、済みませんでした。今日はひるすぎうっかりして棚をあけて置いたもんですから大將早速親牛のところへ行って半分ばかり呑んでしまいましたね…」

語り その人はわらいました。

ジョバンニ「そうですか。ではいただいて行きます。」

牛乳屋「ええ、どうも済みませんでした。」

ジョバンニ「いいえ。」

語り ジョバンニはまだ熱い乳の瓶を両方のてのひらで包むようにもって牧場の柵を出ました。

語り そしてしばらく木のある町を通って大通りへ出てまたしばらく行きますとみちは十文字になってその右手の方、通りのはずれにさつきカムパネルラたちのあかりを流しに行った川へかかった大きな橋のやぐらが夜のそらにぼんやり立っていました。

語り ところがその十字になった町かどや店の前に女たちが七八人ぐらいつ集つて橋の方を見ながら何かひそひそ談はなしているのです。それから橋の上にもいろいろなあかりがいつぱいなのでした。

語り ジョバンニはなぜかさあつと胸が冷たくなったように思いました。

語り 近くの人たちへ

ジョバンニ「何かあったんですか。」

語り と叫ぶようにききました。

ひとり「こどもが水へ落ちたんですよ。」

語り 一人が云いますとその人たちは一斉にジョバンニの方を見ました。

語り ジョバンニはまるで夢中で橋の方へ走りました。橋の上は人でいつぱいで河が見えませんでした。白い服を着た巡査じゆんさも出ていました。

語り ジョバンニは橋の袂たもとから飛ぶように下の広い河原へおりました。

語り その河原の水際に沿つてたくさんみずぎわのあかりがせわしくのぼったり下ったりしていました。向う岸の暗いどてにも火が七つ八つうごいていました。そのまん中をもう烏瓜からすうりのあかりもない川が、わずかに音をたてて灰いろに流れていたのでした。

語り 河原のいちばん下流の方へ州しゅうのように出たところに人の集りがくつきりまっ黒に立っていました。ジョバンニはどんどんそっちへ走りました。

語り するとジョバンニはさつきカムパネルラといっしょだったマルソに会いました。

語り マルソがジョバンニに走り寄ってきました

マルソ「ジョバンニ、カムパネルラが川へはいつたよ。」

ジョバンニ「どうして、いつ。」

マルソ「ザネリがね、舟の上から烏うりのあかりを水の流れる方へ押してやろうとしたん

だ。そのとき舟がゆれたもんだから水へ落っこつたろう。するとカムパネルラがすぐ飛びこんだんだ。そしてザネリを舟の方へ押しよこした。ザネリはカトウにつかまった。けれどもあとカムパネルラが見えないんだ。」

ジョバンニ「みんな探してるんだらう。」

マルツ「ああすぐみんな来た。カムパネルラのお父さんも来た。けれども見附からないんだ。ザネリはうちへ連れられてった。」

語り ジョバンニはみんなの居る方へ行きました。そこに学生たち町の人たちに囲まれて青じろい尖ったあごをしたカムパネルラのお父さんが黒い服を着てまわりの立って右手に持った時計をじっと見つめていたのです。

語り みんなもじっと河を見ていました。誰も一言も物を云う人もありませんでした。

語り ジョバンニはわくわくわくわく足がふるえました。魚をとるときのアセチレンランプがたくさんせわしく行ったり来たりして黒い川の水はちらちら小さな波をたてて流れているのが見えるのです。

語り 下流の方は川はば一ぱい銀河が巨しく写ってまるで水のないそのままでのように見えました。

語り ジョバンニはもうあの銀河のはずれにしかないという感じがしてしかなかったのです。

語り けれどもみんなはまな、どこかの波の間から、「ぼくずいぶん泳いだぞ。」と云いながらカムパネルラが出て来るか或はカムパネルラがどこかの人の知らない洲にでも着いてしまった。誰かの来るのを待っているかどうかなような気がして仕方ないのでした。

語り けれども俄かにカムパネルラのお父さんがきつぱり云いました。

カムパネルラのお父「もう駄目です。落ちてから四十五分たちましたから。」

語り ジョバンニは思わずかけよって博士の前へ立って「ぼくはカムパネルラの行った方を知っていますぼくはカムパネルラといっしょに歩いていたのでと云おうとしましたがもうのどがつまって何とも云えませんでした。」

語り すると博士はジョバンニが挨拶に来たとも思ったものですか、しばらくしげしげジョバンニを見ていましたね。どうも今晚はありがとう。」

カムパネルラのお父「あなたはジョバンニさんでしたね。どうも今晚はありがとう。」

語り ジョバンニは何も云えずにただおじぎをしました。

語り 博士は堅く時計を握ったまままたききました。

ジョバンニ「いいえ。」

語り ジョバンニはまた川下の銀河のいっばいにうつつた方へじっと眼を送りました。

